校友時報

昭和40年6月10日
編集人兼發行所
秋田県能代市畠町追分2
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所　大勝堂印刷所

四十周年を迎えて

新生徒会発足

創立四十周年を迎えた今年、九月には盛大な文化祭や記念式典などが計画されている。また三月の選挙で新役員も決まり、今までに生徒総会、校内体育大会などが行なわれた。しかし文化祭をひかえ、生徒の無関心、非協力のなかで生徒会は四十周年に値する活動ができるであろうか。全校生徒が今年の生徒会活動について考える必要がある。

昭和四十年度前期新生徒会役員は三月に行なわれた選挙の結果次のように決まった。

会長選挙は初め一名が立候補したが不信任されたため再び三人が立候補して投票された。その結果安井幸三君（三C）が選ばれた。また副会長には塚本亮一君（三F）が選ばれた。同時に行なわれた他の信任投票で三十一人の役員が決まった。

主な役員は次の通り。

▽生徒会長　安井幸三
〃副会長　塚本亮一
▽総会議長　中田文輝
▽選管委員長　日向野富司男
▽企画部長　七戸正孝

このように新役員が決まったわけだが今期も生徒会にはなお多くの問題を残している。最近は生徒会が十分に活躍していないという批判が相当多く、また事実あまり活発だったとは言えないようである。それは生徒会の最大の行事である能高祭によく表われていたように思われる。そこで昨年度の能高祭をふりかえってみよう。まず前夜祭のフォークダンスには多数の生徒が参加し、若いエネルギーが満ちあふれていたが、翌日は例年どおりの催し物でマンネリ化したものであった。能高祭に対する批評云々は毎年機会あるごとに論ぜられまた反省されているが結局は生徒の文化祭に対する感情の盛り上がりがなく、一部クラブ員、実行委員の文化祭で終っている感じが強い。

また生徒会活動が不活発だったといわれている原因の一つに〃選挙〃そのものに問題があると思われる。昨年度後期、本年度前期とも立候補日が延期になったり、立候補者を各クラスから推薦したりで全く盛り上がりのないものに終わってしまった。自分から進んで立候補して自分たちの生徒会をもっと活発にしていこうとする考え方が全くみられないのである。また選挙する側にも真剣さが欠けていたように見うけられた。全校生徒のなかにはどうでもいいからただ決まりさえすればよいとか、投票用紙にいたずらして無効になったとかいうようなことが多数あった。自分たちの生徒会であることを考えずに役員だけがやればいいんだという考え方には大きな問題がある。

選挙方法を変えてみる必要も感じる。本年度の場合各クラスで投票し、それを選挙管理委員がまとめるという方法で行なわれたがあまりよいやり方ではなかったようだ。二年ばかり前には体育館に全員を集めて投票する方法をとり、その時にはかなりの成果が上がっていた。このような例もあり今一度全般的に考え直してみるべきではないだろうか。クラブ活動にしてもいま一つパッとしない面がある。この大きな原因としてクラブ員の不足があげられる。中には四・五人しかいないクラブもありこの悩みは深刻である。クラブにはいらない理由として、大学受験に対する不安感、圧迫感によるところが大きい。この傾向は普通高校として当然でありまた現在の日本においてやむをえない事である。しかし高校生活とは勉強のみであろうか自分の好きな運動で精一杯汗を流すことも、自分の趣味や特技を伸ばすことも高校生活にとって大きなプラスになるのではないだろうか。

ことしは四十周年にあたり企画部ではより盛大な音楽会と能高祭を計画中である。また学校側では記念式典、記念植樹、記念新聞、永年勤続者表彰式などが考えられている。われわれ能高生はこの年を自主、協力で実りあるものにしていこうではないか。

生徒会長の安井君はことしの抱負について、「ことしは四十周年でもあるし文化祭を盛大にやりたいクラブ活動でも普通高校では珍しいくらい活発な本校なので多くの人がクラブにはいりさらに強力な能代高校にしてもらいたい。私自身としても全校生徒のリーダーとして一生懸命がんばるつもりだ」と語った。

がくせいのみせ
キムラヤ
学用品・事務用品
はたまち 2~5535

正門道路舗装成る

正面玄関前の道路舗修工事が、四月下旬に完成した。

この工事は、本校が今年の九月二十三日で四十周年を迎え、その記念行事の一つとして行われたもので、総工費六十七万六千八百円を投じて四月十日から着手されていたものである。

これによって、校門前の坂道から正面玄関、昇降口に続く道路一面にアスファルトがしかれたわけだが、舗装前はデコボコのじゃり道で歩きにくい上にほこりがひどく以前から不満の声が多かっただけに喜ばれている。

また中和通りから見上げたさまはアスファルトの灰色にプラタナスの緑が映え、一段と風格が増したようである。

部説

生徒の意見を校則に

五月の連休にさきがけて本校では全生徒に校外生活における諸注意が配られた。その内容は割に通り一ぺんなものであったが禁止事項の中に〃友だち同志の喫茶店出入禁止〃というのがあった。これは日頃喫茶店通いの生徒にとってはもちろん、その他の生徒にも様々な形で少なからず動揺を与えたものと思われる。なぜならば高校生にとって帰宅時間の制限や服装上の制限は常識としてあるいは自分自身の確かな考えを持って認めることの出来ることであっても、十八才未満の断り書きもなく、お金さえ出せばいつでもはいれるはずの喫茶店にはいることが禁止されることは誠に考え及ばないところであるからだ。それにすねっかじりのくせに喫茶店にはいるなど生意気だと誰かが言ったところで禁止になるはずもないし、実際喫茶店は勉強疲れの生徒にとって絶好の憩いの場であるかもしれないのだ。それではなぜ禁止されたのであろうか。原因は生徒の行動で結果は先生たちの決断である。一口に原因は生徒の行動といっては不満な生徒もいるであろうが、その人たちはもちろん、現に非行生徒と目される生徒はそれ以上にこのことを考え認めなければならない。能高生の現在の立場では、この禁止に文句を言うなどもってのほかと思う。しかしここで考えなければならないのはこのような禁止事項が何の前振れもなく全く突然能高生の前に出されることである。禁止そのものより禁止にいたる方法が問題である。このことは感じやすい生徒にとって大きなショックであり、そしてそれがいつの間にか大部分の生徒の訳の分らない不満となってしまうのである。実際この不満は伝染病のように広まり、不治の病のように能高に居すわった。しかし今時長い病気などはやらない。一時も早くこの不満を追放すべきである。それには先生たちの協力が絶対に必要であると思う。なぜならば生徒は今後決められるであろうさまざまな禁止、あるいは規則が生徒の知らぬ間になんの前触れもなく決ってしまうことのないことを願い、今後禁止事項を設ける場合は何らかの方法で例えば全校生徒にその問題に関するアンケートを出すとか、あるいは生徒委員会での意見を聞くとかというような形で生徒の考えを聞いてくれることを望んでいるからである。それが現在の高校生活で最も欠如している先生と生徒間の意志の疎通の最大の方法であり、明るい学校生活建設への道であると思う。

本年度予算決定

生徒総会開かる

本年度第一回生徒総会は四月三十日の二・三校時体育館で行なわれた。この度の生徒総会は昨年度の決算及び今年度の予算を審議する為開かれたものである。初めに企画部と各クラブ代表が決算を発表し、過半数の挙手により承認された。次に予算審議に移り質疑応答の後原案通り可決された

今回の生徒総会は質問が多く、活発だったが、少数の議事進行を妨げようとする者の為、審議が混乱したのは残念であった。なお、今年度生徒会予算はほとんどのクラブが増加し、わずかに科学クラブだけが四百四十円減少している。この科学クラブの減少の理由として〃今まで予算に組まれていた機関誌はたんにクラブ内だけで読まれていたものなので今年からはクラブ員の負担とする〃という理由があげられている。また主に増加したクラブは新聞部の三万円を筆頭に、硬式野球部の一万二千九百円、剣道部の一万二千八百円などである。

昭和40年度生徒会予算

弁論	1,500	（+ 500）
文芸	40,000	（+ 3,200）
科学	38,500	（− 440）
音楽	7,610	（+ 1,860）
書道	19,350	（+ 6,000）
絵画	15,500	（+ 545）
新聞	80,000	（+30,000）
演劇	33,750	（+ 5,750）
ブラバン	85,950	（+ 6,250）
写真	15,300	（+ 2,800）
硬式野球	220,000	（+12,900）
軟式野球	54,000	（+ 5,500）
庭球	47,780	（+ 6,680）
卓球	31,000	（+ 2,000）
バスケット	35,400	（+ 7,540）
バレー	73,000	（+ 6,300）
体操	34,800	（+ 7,350）
陸上競技	25,610	（+ 8,560）
柔道	31,650	（+ 2,900）
剣道	72,800	（+12,800）
スキー	13,600	（+ 3,600）

時評

五月三日のこと

大山行夫

五月三日の朝日新聞の十四頁に「教科書の中の憲法の歩み」という一文が載っている。これを読んで、私は日頃忘れられがちな最も大切なことについて反省させられた。新憲法はことしで満十八才になった。三年生の諸君と同い年になるわけだ。この十八年間、彼が健全に成長してきたかと親の目になって観察してみると、実に驚いたことはこの大切な青年期に彼が、栄養失調の状態にされている——つまり彼の彼たるゆえんである第九条の精神が、現行の教科書では徐々に影の薄い者にされつつある——という事実を知って悲しまざるを得ない。この記事にあるように、確かに私たちは中学の時「新しい憲法の話」（昭和二十二年の文部省編社会科副読本）を手渡されて、社会の先生からその精神を教わったものである。これには軍艦や大砲や飛行機を大釜に投げ込んで、それがビルや電車に生れ変る絵で扉を飾ってあった。

これが、〃三十六年、四十年版の「新しい社会」には、「憲法と平和」の項は姿を消し、戦争放棄のくわしい説明も省かれている。〃という記事文を見たら、愕然とした。彼の栄養障害は、三十六年頃から著しくなったらしい。前述の副読本では、第九条の説明を次のようにしている。「戦争に役立つ兵器や軍艦や飛行機だとかいうものを一切持たなくなった。これを戦力の放棄という。日本は世界に先がけて正しいことをするのだ。」と、これが、その場限りの説明であっては悲しい。

昭和四十年五月三日——確かに自衛隊の存在もようやく異様な感じがなくなった現今であるが、その現在の日本で真に世界に誇り得るものは、この平和憲法の精神であろう。この憲法の精神を徐々に忘れ去ってはいけないのである。現在の平和を私たちは手ばなしてはいけない。その為に何としても十八才の彼の栄養欠陥を回復させてやりたい。これを癒すには、若い世代の強い関心と、心ある認識が必要である。彼と同じゼネレーションである諸君に私が代って、このことをお願いしたい

そして五月三日という休日は単なるゴールデン・ウイークの中日（なかび）であってはならないと思う。

（国語担当）

文化講演会開催

六月五日午後一時半より公民館ホールにおいて、能代市公民館、能代山脈の会の共催による文化講演会が開かれた。テーマは〃戦後二十年の日本の歩みをどう考えるか〃というもので〃思想の科学の方法と成果〃と題した思想の科学編集長やまねきよし氏、〃戦後日本女性の歩み〃と題した評論家安田武氏、また〃日中関係を軸に考える〃と題した中国文学者竹内好氏の講演があった。なお来能予定だった東京大学教授日高六郎氏は母堂急病のためお見えにならなかったが当日は本校生徒も多数つめかけて熱心に講演に聞きいっていた。

フレッシュな風味
アンドーナツ
エーワン・ベーカリー
能代市大町　T 2−2343

材料
カメラ
あわじ
鍛治町
T 2−6412

レコード. 楽器
○ヒット曲、新譜、強力盤豊富に取り揃えてあります。
○レコードのことならなんでも相談ください。
○レコードは各社特約の専門店より。
各レコード会社
全音第一楽器
特約店
名曲堂
柳町中央　T 2−5808

美しい仕上げのD・P・E・
カメラの特別販売をしております
カメラの
デン助
柳町　T 2−4576

Opt　Pen
カモヤ
畠町　T 2−3740

学校前のもとの所
でも営業しております
章月
学校前　二の四八〇八
大米百貨店　二の三八四四
鍛治町　二の六四三四